



眼 *Insaghit*

令和4年1月27日

なりきる・まねる

自己の世界の拡張

第1学年 体育科 まねっこ なりきり へんしんワールド！

第1学年体育科の学習では、1年生の表現に取り組みました。1年生は、なりきって自己の世界に浸る時期でもあり、自分の世界を中心にして、周りの友達の様子と自分の感覚が共鳴したときに、それをまねてさらに自己の世界を拡張していくことで、学びを深めていきます。その「なりきり」や「まねる」といった学ぶ術を生かして、徐々に表現の在り方が変化していく姿がありました。

「獲物を狙うわし」を表現していく中で、ふわふわと手を動かしている表現から、大きく手を広げて円を描きながら走り回る表現へ、獲物を捕りに行く様子を「ポンッ」と飛び跳ねて、すっと体をかがめる表現へ、どんどん表現の在り方が変容していく子供たちの姿がありました。

ここで、教師が意識していたのが「特徴がわかりやすい動物」を教材に取り入れること。「うさぎ」「かまきり」「わし」「ぞう」など子供たちがその特徴を捉えて、わかりやすく表現できるものを教材として扱うことで、その表現に浸ることができるようにコーディネートしていくことの重要性が見えてきます。

第1学年の対象との関わりを極上に導く探究の在り方がだんだん明らかになってきました。自己の世界を中心とした世界観にあるこの時期の子供たちには、「遊び」を軸とした学習活動を充実させていくこと。自己の世界に没入していく「なりきる」「動作化する」などの術を働かせていくこと。そうすることで、自己の世界とふれあう対象との関わりを深めていき、自己の世界の拡張へと向かうことができるというものです。

個々で、もっともキーとなってくるものが、教師の関わり方です。ここについては、研究会においても、議論の中心となりましたので、次に稿を改めて考えてみたいと思います。



教師の価値付け

1年生のよどころ

今回の提案授業でよりはっきりしたのが、第1学年の子供たちにとって「教師」の存在がとても大きいということです。研究会の中でも「重すぎる」とも表されたくらい、子供たちは、教師の声かけに影響されていきます。「ぞうさんのけんか」の表現の際に、多くの子供たちは、手を鼻に見立ててそれを互いにぶつけ合う表現をしていました。するとAさんが、足をポンッと跳ね上げます。そこに、授業者がずっと来てその表現を価値付ける声かけをしました。すると横にいたBさんが同じように、足を跳ね上げる表現をしました。これが、一人にとどまらず周りの2・3人の子供たちに広がっていきます。子供たちは、「表現としての価値」を「教師の価値付け」によって、判断している姿だといえます。だからこそ、研究会で協議されたのは、教師の価値付けの在り方です。何に価値付けをするのか。「教師の描いている表現」に価値付けしていく。「子供たちが描いているものに対する子供たちなりの表現」に価値付けしていく。この、どちらが目指すべき探究であるのか。

ここには、表現技能としての習得と表現としての探究の違いがあるように思います。今回の授業においても、子供たちの表現が洗練され、ある程度一様な表現としての高まりが見られました。ここにも表現としての高まりはあるように思います。その一方で、子供たちの表現能力としての高まり（「思い」と「動作化」の連関を他者を通してより豊かにする。）としてどうなのかを問うていく必要があるように思います。

